

『元朝秘史』における疑問助詞についての一考察*

栗林 均

1. L. Ligeti (1971) による『元朝秘史』のモンゴル語ローマ字転写には、疑問の助詞として $-\bar{u}/-\bar{ü}$, $-u'u/-ü'ü$, $-yü/-yü$, $-yu'u/-yü'ü$ といった形が見られる¹。

ここで $-\bar{u}/-\bar{ü}$ のようにスラッシュ (/) を隔てて並べた形は、それらが母音調和による交替形であることを示している²。また、このローマ字転写には《 \bar{u} 》《 $\bar{ü}$ 》のように長母符号を伴った母音字が用いられているが、『元朝秘史』でモンゴル語を表記している漢字には母音の長短の区別はなく、長母音の表記は Ligeti の推定によるものである。Ligeti が疑問の助詞に長母音の記号を付したのは、 $-u/\bar{u}$ と $-u'u/\bar{ü}'ü$ が疑問の助詞の交替形として用いられており、これらは同じ音声実態を表記しているであろうこと、そして後者 ($-u'u/\bar{ü}'ü$) のような表記があるからには、その実態は長母音であったと推定したものであろう。

このように、 $[-\bar{u}/-\bar{ü}, -u'u/\bar{ü}'ü]$ は疑問の助詞の交替形としてひとつのまとまりとして捕らえることができ、 $[-yü/-yü, -yu'u/-yü'ü]$ も同様にひとつのまとまりと見なすことが

* 本稿は2004年5月1日～4日に中国北京市で開催された中央民族大学蒙古文文献国際學術研討会における「关于《元朝秘史》中疑问语气词」と題する発表をもとに加筆・補正したものである。

¹ Ligeti (1971) には、 $aqun-u$ (147:-7), $busut-u$ (64:3), $ta'alaqdaqun-u$ (120:3), $bolqu-yu$ (153:1, 250:13, 256:-8) のように、長音符号が付されていない $-u$, $-yu$ という形も見られる。しかし同じ語が同書の他の箇所では $aqun-\bar{u}$ (58:9, 125:10), $busut-\bar{ü}$ (63:-1, 68:6), $bolqu-yü$ (151:-1, 234:-6, 245:-10, 245:-3, 257:-2) のように $-\bar{u}$, $-yü$ と表記されており、これらは長音符号を付け忘れた誤記と考えられる (例に付した括弧内の数字は出現位置の頁と行を表す)。

² 上のローマ字転写に用いられている《 \bar{u} 》と《 $\bar{ü}$ 》はそれぞれ後舌の男性母音と前舌の女性母音を表しているが、『元朝秘史』でモンゴル語を表記している漢字には《 u 》と《 $ü$ 》の母音の区別はない。Ligeti の転写は、母音調和を考慮しつつ当時のモンゴル語の音韻を推定して漢字表記に無い区別を書き分けたものであり、実際はそれらは同じ漢字で表記されていることが多い。

できる。本稿では、これをふまえて「-ü/-ü, -u'u/-ü'ü」と「-yü/-yü, -yu'u/-yü'ü」にはどのような違いがあるのか考察する。

2. Ligeti (1971) のローマ字転写の中で、「-yü/-yü, -yu'u/-yü'ü」と表記されている疑問の助詞は『元朝秘史』全12巻を通して33回現れる。それらのすべてを四部叢刊本の漢字音訳形と傍訳漢語とともに列挙すれば次のとおりである。例は、出現位置³、ローマ字転写形、さらに括弧の中に漢字音訳形、傍訳漢語の順で掲げる。

(1) -yü (25回)

- 02:15:06 aqu-yü (阿中忽由, 莫不)
 02:15:08 aqu-yü (阿中忽由, 莫不)
 02:49:09 aĵiraba-yü (阿只舌刺罷田 [!], 回了有)⁴
 03:18:08 boldaqu-yü (孛勒荅中忽由, 被做的有)
 03:19:06 boldaqu-yü (孛勒荅中忽由, 被做有)
 04:24:09 bolqaqu-yü (孛勒中合中忽由, 得做麼)
 05:04:04 yadaqu-yü (牙荅中忽由, 不能有)
 05:44:03 ĵokiqu-yü (勺乞中忽由, 且麼有)
 06:16:03 hiluqatqu-yü (喜魯中合暢中忽由, 惹的)
 06:16:04 qalqu-yü (中合暢中忽由, 鬪的)
 06:21:08 qalĵirqu-yü (中合暢只舌兒中忽由, 莫是傍)
 06:33:08 qaqačaqu-yü (中合中合察中忽由, 分離的麼)
 07:10:06 čidaqu-yü (赤荅中忽由, 能的麼)
 07:13:07 ĵokiqu-yü (勺乞中忽由, 宜麼)
 07:24:04 bolqu-yü (孛勒中忽由, 中麼有)
 07:27:01 bolqu-yü (孛勒中忽由, 中麼有)
 07:47:08 oroqu-yü (幹舌羅中忽由, 入去有)
 11:45:09 bolqu-yü (孛勒中忽由, 中有麼)
 12:21:09 bolqu-yü (孛勒中忽由, 中麼有)
 12:22:06 bolqu-yü (孛勒中忽由, 中麼有)
 12:34:01 bolqu-yü (孛勒中忽由, 中麼有)
 12:34:07 aqu-yü (阿中忽由, 有麼有)

³ コロンで区切った2桁の数字は巻, 丁, 行を表す。たとえば, 「02:15:06」は「第2巻:第15丁:第6行」を表す。

⁴ 「田」は「由」の誤記。

12:48:07 bolqu-yū (孛鞠^中忽由, 中麼有)

12:49:06 bolqu-yū (孛鞠^中忽由, 中麼有)

12:49:07 aqu-yū (阿忽由, 有麼)

(2) -yu'u (2回)

11:22:06 Ĵoci-yu'u (拙赤余兀, 人名行麼)

11:31:09 aldaqu-yu'u (阿勒荅^中忽余兀, 不中麼)

(3) -yū (5回)

05:23:03 ökgü-yū (斡克古由, 與麼)

06:21:09 kōnedeledü-yū (欵迭列都由, 莫是横)

06:33:08 hirijegü-yū (希^舌離者古由, 分離有)

10:29:08 üjebe-yū (兀者別由, 見了麼)

12:19:07 ügülekdegü-yū (鳴詰列^克迭古田 [!], 被說有)⁵

(4) -yü'ü (1回)

07:36:09 üjebe-yü'ü (兀者別余兀, 見了麼)

3. 上の33例はすべて母音で終わる語に付いていることから、一見したところ「-yū /-yü, -yu'u/-yü'ü」は「母音で終わる語」に、もう一方の「-ü/-ü, -u'u/-ü'ü」は「子音で終わる語」に付くという様に使い分けられているのではないかという疑いが生じる。これはモンゴル文語の名詞対格形語尾に「-yi」と「-i」という交替形があり、-yiという形が「母音で終わる語幹」に、-iという形が「子音で終わる語幹」に付くことと符合しており、モンゴル語の形態規則に合致しているように見える。

しかし、『元朝秘史』における「-ü/-ü, -u'u/-ü'ü」の現れを調査すると、それらは次のように「子音で終わる語」にも「母音で終わる語」にも付いており、この推定は当たらないことが分かる。

A) 「-ü/-ü, -u'u/-ü'ü」が子音で終わる語に付いている例：

čidaqun-ü 赤荅^中忽訥 (能麼 02:09:10), busut-ü 不速禿 (不是有的麼 03:04:02)

kilbar-ü 乞勒巴^舌魯 (容易麼 10:07:07), ama'ar-ü 阿馬阿^舌魯 (口教麼 06:22:05)

kele'er-ü 客列額^舌魯 (舌教麼 06:22:08), jöb-ü'ü 勺不兀 (是麼 05:46:07)

tab-u'u 塔不兀 (是麼 05:46:07), čaq-u'u 察^中忽兀 (時敢 11:04:05)

niken-ü'ü 你客訥兀 (一箇也... 麼 11:33:08), 等。

B) 「-ü/-ü, -u'u/-ü'ü」が母音で終わる語に付いている例：

⁵ 同上。

uqaba-ū 兀^中合巴兀 (覺麼 01:35:05), ükübe-ū 兀窟別兀 (死了 02:02:01, 02:02:10)
 a[b]qu-ū 阿^[ト]忽兀 (要的麼 02:33:06), o[l]ja-ū 完^[勒]者兀 (外財 02:33:09)⁶
 büyyü-ū 備有兀 (有麼 02:45:03), mana-ū 馬納兀 (俺行呵 05:43:10)
 busu-ū 不速兀 (不是有麼 08:29:06), ile-ü'ü 亦列兀兀 (對面 06:35:05), 等。

4. Ligeti (1971) の転写に 33 回現れる「-yü/-yü, -yu'u/-yü'ü」のもうひとつの特徴は、それらの大部分が、形動詞形語尾 -qu/-gü および過去形語尾 -ba/-be の直後に現れていることである。この観点から先に見た 33 の例をまとめなおせば次のようになる。

(1) 動詞の形動詞形語尾 -qu/-gü に付いているもの (27 例)

bolqu-yü (8 回), aqu-yü (4 回), boldaqu-yü (2 回), jokiqu-yü (2 回),
 bolqaqu-yü, čidaqu-yü, hiluqatqu-yü, oroqu-yü, qalqu-yü, qaqačaqu-yü,
 yadaqu-yü, aldaqu-yu'u, hirijegü-yü, ökgü-yü, ügülekdegü-yü (各 1 回)

(2) 動詞の過去形語尾 -ba/-be に付いているもの (3 例)

añiraba-yü, üjebe-yü, üjebe-yü'ü (各 1 回)

(3) その他 (3 例)

qalñirqu-yü⁷, köndeledü-yü, Ĵoci-yu'u (各 1 回)

先に B) 「-ü/-ü, -u'u/-ü'ü」が母音で終わる語に付いている例、として挙げた中には、動詞の形動詞形語尾 -qu/-gü および過去形語尾 -ba/-be に -ü/-ü が付いている次のような例があることは注目に値する。

a[b]qu-ū 阿^[ト]忽兀 (要的麼 02:33:06)

uqaba-ū 兀^中合巴兀 (覺麼 01:35:05)

ükübe-ū 兀窟別兀 (死了 02:02:01, 02:02:10)

ここで「-yü/-yü, -yu'u/-yü'ü」と「-ü/-ü, -u'u/-ü'ü」とが自由に交替する形式 (free variation) であるとみなせば、ひとつの結論が得られることになる。しかし、その前に、『元朝秘史』における動詞過去形の語尾には -ba/-be という形のほかに -bai/-bei という形もあり、動詞の形動詞形の語尾には -qu/-gü という形のほかに -qui/-güi という形もあることを考え合わせると、「-yü/-yü, -yu'u/-yü'ü」という語境界の付し方を再検討して、

⁶ 例の中の^[ト]は、欠字を補ったことを表す。ローマ字転写中の [b][l] も同様。

⁷ qalñirqu-yü は、動詞の活用形と見なすこともできるが、qalñir- という動詞は実証できないので、ここでは「その他」に分類した。

この形式自体の存在を疑ってみる必要がある。それは、「-yū/-yü, -yu'u/-yü'ü」の「y」は疑問の助詞に属するのではなく、それに先行する語の末尾に属するとみなすことである。これによれば、Ligeti (1971) がローマ字転写している *ajiraba-yü, üjebe-yü* 等の形は、動詞の過去形 *ajiraba, üjebe* に -yū/-yü が付いたものではなく、動詞過去形の別の形 *ajirabai, üjebei* に -ü/-ü が付いたもの (*ajirabay-ü, üjebey-ü*) であり、同様に *aqu-yü, ökgü-yü* 等も形動詞形 *aqu, ökgü* に -yū/-yü が付いたものではなく、形動詞の別の形 *aqui, ökgüi* に -ü/-ü が付いたもの (*aquy-ü, ökgüy-ü*) である。要するに、Ligeti (1971) のローマ字転写に 33 回現れる「-yū/-yü, -yu'u/-yü'ü」のうち、動詞の形動詞形語尾 -qu/-gü および過去形語尾 -ba/-be の直後に現れるものに関しては、「動詞の形動詞形語尾 -qui/-güi および過去形語尾 -bai/-bei に疑問の助詞 -ü/-ü, -u'u/-ü'ü が付いたもの」として説明するのが最も合理的と考えられる。

これに関する過去の研究者たちの見解はどのようなものだっただろうか？

白鳥 (1943) は *aqu-ju* (§80), *ažiraba-ju* (§103) のように表記しており⁸, Ligeti (1971) と同様に「-yū/-yü, -yu'u/-yü'ü」を疑問の助詞のひとつの形式とみなしていたと考えられる。

E. Haenisch (1937) のローマ字転写では、*aḥuyu* (§80), *ujebeyu* (§244) のように、語の境界が示されていないため、どのように解釈していたか不明である⁹。

P. Pelliot (1949) は、本文では多くの場合 *bolquy-u* (§193) や *üjäbäy-ü* (§244) のように表記しながら、注記で「*bolqu-yu?*」「*üjäbä-gü?*¹⁰」のように別の解釈も示して、両方の可能性を示唆している。

I. de Rachewiltz (1972) の索引は、Pelliot (1949) のローマ字転写を利用したものであるが、上の点に関してはすべて *bolqu-yü, üjebe-yü* という表記に統一している。このような語境界の分け方と長音符号を付した母音の表記は、その前年に公刊された Ligeti (1971) の転写方式を採用したものと考えられる。

小澤 (1984-1986, 1987-1989) は、『元朝秘史』の第3巻までの転写と注釈では、疑問の助詞を -yū/-yü とみなしていたが、『元朝秘史全釈』下巻 (1986: 199-201) においてその見方を改め、形動詞形接尾辞 -qui/-güi, 過去形接尾辞 -bai/-bei に -ü/-ü が付いたものと分析した。その理由として、小澤 (1986: 200) は現代モンゴル語 (ハルハ方言) で疑問の助詞「-yū/-yü」が用いられるのはそれに先行する語が二重母音および長母音で終わる場合のみであることをひとつの根拠としている。しかし、『元朝秘史』における語形態と用法はあくまでもその内部の証拠にもとづいた体系として論証すべきことは贅言

⁸ ローマ字転写はそれぞれの研究者の方式による。

⁹ 稀に *ajiraba yu* (§103) といった表記もみられる。この場合は Ligeti (1971) の分析と同じになる。

¹⁰ 「*üjäbä-gü?*」の「g」は誤植ではなく、このような可能性もあることを示したものと考えられる。

を要しないであろう。

栗林・精扎布 (2001) は、基本的には Ligeti (1971) のローマ字転写によりながらも、「-yū/-yü, -yu'u/-yü'ü」に関してはそれらを「ü/ü, u'u/ü'ü」に訂正した¹¹。本稿で示したのは、そうした転写方式を採用した論拠である。

5. Ligeti (1971) のローマ字転写による疑問の助詞「-yū/-yü, -yu'u/-yü'ü」のうち、動詞の活用形に付いていないものは次の3例だけである。

qaljirqu-yü 中合勒只舌兒中忽由 (莫是傍 06:21:08) 「傍のか」

köndeledü-yü 欵迭列都由 (莫是横 06:21:09) 「横のか」

Joči-yu'u 拙赤余兀 (人名行麼 11:22:06) 「ジョチ (に) か」

このうち qaljirqu-yü (莫是傍 06:21:08) と köndeledü-yü (莫是横 06:21:09) は対になってほとんど同じ意味を表している。小澤 (1987: 123-124) は、これらを qaljirqui, köndeledüi という形容詞に -ü/-ü の付いた形 (qaljirquy-ü, köndeledüy-ü) としているが、qaljirqui, köndeledüi という形は『元朝秘史』の他の箇所だけでなく他の文献にも実証されない。köndeledü という形も同様であり、qaljirqu という形は qaljirquda (被斜人行 08:17:04) という語と関係が認められるがそのままの形では他の箇所に見出されない。要するに、先行する語の形が不明であるため、疑問の助詞の形も確定できない。当然「-yū/-yü」という形が存在したとする積極的な証拠もない。

Joči-yu'u (人名行麼 11:22:06) について、小澤 (1989: 271) は Ligeti (1971) と同様に転写しており、注記も付していない。ここでのみ疑問の助詞が -yu'u という形をとっているのだろうか？ これに関しては、Joči という語の末尾の母音 i の影響で、疑問の助詞 -u'u との間にわたりの音として y が付加されたと考えることも可能である。しかし、筆者は、ここで Joči-yu'u の傍訳として「人名行麼」と「行」の字があることに注目したい。この語は、次のような文の中で使われている。

(ローマ字転写)	Joči-yu'u	tüšin	ügülemüi
(傍 訳)	人名 行麼	委付	説有
(和 訳)	ジョチをか	任じて	言う

これは、チンギス・カンがイエスイ妃の助言により自らの後継について諸子の意見を

¹¹ 先行する語との間にあるハイフンを削除したのは、疑問の助詞を独立の語と見なしたことによる。

聞こうと、まず長子のジョチに考えを述べるよう促したところ、次子のチャガタイが遮って「ジョチに(まず)述べよというのは、ジョチに任せるとして(そのように)仰せられるか?」と発した言葉である。疑問の助詞は文末でなく、*Joči* に付いている。

傍訳の「行」は、モンゴル語の対格(「~を」)の訳となっている。モンゴル語の動詞 *tüši-* (委ねる, 任せる) は対格を要求する他動詞であり、*Joči-yu'u* は動詞 *tüši-* (任ずる, 委ねる) の直接目的語となっていることから、これを *Joči* に対格語尾 *-yi* と疑問の助詞 *-u'u* が付いたもの (*Joči-yi-u'u*) が縮約された形と見なすことはできないであろうか。この解釈を、ローマ字転写で表記すれば、*Joči-y[i]-u'u* のように表わすことができる。

参考文献

- Haenisch, Erich (1937) *Manghol un Niuca Tobca'an (Yüan-ch' ao pi-shi): Die Geheime Geschichte der Mongolen*. Leipzig: Otto Harrassowitz.
- 栗林均・确精扎布 (2001) 『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』東北大学東北アジア研究センター。
- Ligeti, Louis (1971) *Histoire secrète des Mongols*. Monumenta linguae Mongolicae collecta I. Budapest: Akadémiai Kiadó.
- (1972) *Pièces de chancellerie en transcription chinoise*. Monumenta linguae Mongolicae collecta III, 129-166. Budapest: Akadémiai Kiadó.
- 小澤重男 (1984-1986) 『元朝秘史全釈』上・中・下. 風間書房.
- (1987-1989) 『元朝秘史全釈続攷』上・中・下. 風間書房.
- Pelliot, Paul (1949) *Histoire secrète des Mongols: restitution du texte mongol et traduction française des chapitres I à VI*. Paris: Adrien-Maisonneuve.
- Rachewiltz, Igor de (1972) *Index to the secret history of the Mongols*. Bloomington: Indiana University.
- 白鳥庫吉 (1943) 『音訳蒙文元朝秘史』東洋文庫.